

三島由紀夫「みのももの月」論

——『文藝文化』同人と「古今和歌集」——

A Note on Mishima Yukio's “Minomono-tsuki”: A friend of “Bungei-Bunka” and “Kokin-wakasyu”

九 内 悠水子

Yumiko KUNAI

Based on the survey of “Mishima Yukio Bunko” of Hijiyyama University, the main focus of this paper was placed on the “Minomono-tsuki (moonlight on water surface)” involved in the “Shimizu Fumio old stock”.

Shimizu left his note onto the novel, “Minomono-tsuki” <document number MAMf0-80>. It is generally pointed out that “Kagerofu-no-nikki (diary of dragonfly)” and “Hototogisu” written by Tatsuo Hori, as well as their original literature, “Kagerofu-Nikki” influenced “Minomono-tsuki”.

As far as Shimizu's note is concerned, however, it can be concluded that he recognized the influence of “Kokin-Wakashu (Kokin poet collection)” upon this novel.

Mishima created characters filled with intelligence and culture, by citing Waka (short poetry) involved in ancient works such as “Kokin-Wakashu” or “Ise-Monogatari” into “Minomono-tsuki”. And then, he described the suffering and sorrow for waiting = bearing of dynasty persons, in a multi layered or stereoscopic manner. Moreover, he succeeded to develop the story by relating images from Waka to Waka.

There still remain some issues to be considered. For instance, how did Mishima learn the classics in relationship with Zen-meï Hasuda, Fumio Shimizu, or coterie of “Bungei-Bunka (literary culture)”?. As a result, what kind of literary view was formed by them? Moreover, how did they reflect in this work? More precise study is necessary to answer these questions. The note of Shimizu is considered to be a very valuable clue for this purpose.

1. はじめに

比治山大学蔵「三島由紀夫文庫」の清水文雄旧蔵資料（以下旧蔵資料）には、拙稿「三島由紀夫「比治山大学蔵『三島由紀夫文庫』調査報告（一）」（3）^{*1}で紹介したように、清水の手によるラインや書入が残された資料がある。「三島由紀夫短編全集」（昭和39・2 新潮社）（資料番号MA Mi 0・84）はその一つであり、「みのもの月」、「祈りの日記」にその跡を見ることが出来る。本稿では、昭和一七年一月に『文藝文化』に掲載された短編「みのもの月」を取り上げ、その書入実態を報告するとともに、そこから見えてくる、習作期三島作品における清水、ならびに『文藝文化』同人の影響について考察していく。

「みのもの月」は『文藝文化』に掲載されたのち、処女作品集『花ざかりの森』（昭和19・10 七条書院）に収録されている。『文藝文化』と三島との関係を考える上で非常に重要な作品と言えるが、これまで本格的にこれを論じたものは数えるほどしかない。

三島はこの作品について、「王朝日記の世界の模写」^{*2}、「恩師清水文雄先生の同人雑誌『文芸文化』に載った『花ざかりの森』『みのもの月』は、もつとも国文学風、王朝風^{*3}」、「日本古典、および堀辰雄によるその現代語訳^{*4}といった言及をしている。作品名こそ出さなかったものの、堀の影響を認めていることから、「みのもの月」と「かげろふの日記」（昭和12・2「改造」）との関連についてはこれまで、相原和邦氏、奥野健男氏、小埜裕二氏、柳川朋美氏^{*5}らによって検討がなされてきた。中でも小埜氏は「堀の作品が『蜻蛉日記』の筋をふまえたものであるのに対して、三島の作品は『蜻蛉日記』

を換骨奪胎し、書簡体で構成させた、はるかに自由なもの」と評価し、柳川氏は、「三島は、『かげろふの日記』の後半部と続編『ほととぎす』に顕著な、男を苦しめぬく女、煩惱多き女、強い心の持ち主といった女の性格を『みのもの月』に取り入れている」との指摘を行っている。

また、「かげろふの日記」や、その続編「ほととぎす」（昭和14・2「文藝春秋」）以外の作品との影響関係については、小埜氏が「和泉式部日記」、柳川氏が謡曲「羅生門」をそれぞれ挙げている。

一方、清水は、「みのもの月」に「古今和歌集」をはじめとする和歌の影響を認めていたようである。以下、書入の実態を示しながら、その内実を明らかにしていくこととする。

2. 「みのもの月」書入の実態

書入（「三島由紀夫短編全集」（前掲）（資料番号MA Mi 0・84）はすべて薄い鉛筆書きでなされており、ライン・丸囲み・欄外へのメモの三種がある。

【一通目】

P68下L7 冒頭部の「どうぞお心を昔にかへして下さいまし」の右上肩に【女

—男】の書入

P69下L2 【むなしきそらにみちる】を丸囲み、そこから欄外下部余白へ線を

引き、【古今恋一488】の書入

P69下L3 【わがこひ】を丸囲み

【二通目】

P69下L4 冒頭部の「わたくしはひどく疲れてしまつてゐる」の右上肩に【男

―女〕の書入

P70上L5 【少将】を丸囲み、欄外上部余白に【少将】の書入

P70上L6 【夏むし】を丸囲み、そこから欄外右余白へ線を引き、【古今恋

―544】の書入

P70上L7 【ひとつおもひ】を丸囲み

P70上L-4 【東の受領をしてゐた女】を丸囲み、欄外上部余白に【受領の女】

の書入

P70下L3 【桂の如き君】を丸囲み、そこから欄外右余白へ線を引き、【伊

セ物語七三段】の書入

P70下L-9 【とまれこんなくあなたに疲れてしまつたのではないかとおもふ

にライン

P70下L-4 【わたくしがあなたを離れてどういふ意味をもつか考へてほし

い。】にライン

〔三通目

P71上L-8 冒頭部の「わたくしの健氣によそほうた陽氣な文に」の右上肩に

〔女―男〕の書入

P71下L10 【夏萩】を丸囲み、欄外下部余白に【夏萩】の書入（↓P73下L8も同様）

【橘の香が】にライン

P72上L12 【あの車のぬしはあなたではあるまいか】にライン

P72上L-5 【少将】を丸囲み、欄外上部余白に【少将】の書入

P72上L-3 【夏むし】を丸囲み

P72下L3 【少将】を丸囲み

P72下L8 【本當のことをまをしますとくちこめてゐるのをおぼえるばかり

でございます】にライン

P73下L-3 【受領の女】を丸囲み、欄外下部余白に【受領の女】の書入

P74上L2 【菊のしら露】を丸囲み、そこから欄外右余白へ線を引き、【古今

恋―470】の書入

P74上L3 【ひるは思にあへずけぬべし】を丸囲み

〔四通目

P74上L4 冒頭部の「どうもわたくしはおそろしくてならない」の右上肩に

〔女―男〕の書入、【君】を丸囲み

P74上L5 【あれ】を丸囲み（↓P74上L9、P74上L-7、P74上L-4、P74下L2、P74下L-9、

P75上L3、P75上L-8、P75上L-7、P75上L-4、P75下L1も同様）

P74上L12 【受領の女】を丸囲み、欄外上部余白に【受領の女】の書入

P74上L-7 【女】を丸囲み（↓P74上L-2も同様）

P74下L5 【受領の女】を丸囲み（↓P74下L-4、P74下L-1、P75上L3、P75上L10も同様）

P75上L7 【橘の香】にライン

P75上L-9 【少将】を丸囲み、欄外上部余白に【少将】の書入

P75上L-6 【私はその日からこのかた―一ことばかりが危ぶまれてくるやうになつた】にライン、

【あれ】を丸囲み

P75下L1 【わたくしはそんな風に―はげしい戀に疲れたのだ】にライン

P75下L2 【受け身ばかりの戀は―わたくしは忘れてゐたわけだよ】にライン

P75下L9 【少将】を丸囲み

P75下L10 【夏蟲】を丸囲み、

P75下L-7 【夏蟲】を丸囲み、そこから欄外下部余白へ線を引き、【古今恋

―544 561 600】の書入

P75下 L-4 【夏萩】を丸囲み

【五通目】

P75下 L-1 冒頭部の「君のねんころな文を」の右上肩に【男―少将】の書入、

【あれ】を丸囲み（↓P76上 L2、P76上 L-8も同様）

P76上 L5 【受領の女】を丸囲み

P76上 L9 【夏萩】を丸囲み（↓P76上 L10、P76上 L-8も同様）

P76上 L12 【けふも空のひとすみでくわたくしを誘うてゆくなものもないかのやうに】にライン

P76上 L13 【鳴神】を丸囲み、欄外上部余白に【雷（丸囲み）】の書入、「あふ

ことのかくものはるかに」の網掛け部分から欄外余白へ線を引き、それぞれ【は】、【る】と書入（修正）、また欄外右余白に【古今恋

一482】と書入

P76上 L-6 【あさんづのくさ公達や】まで上部へ丸括弧

【六通目】

P77上 L11 冒頭部の「ずるぶんと久しく」の右上肩に【男―女】の書入

P77下 L4 【色こく咲きたる】を丸囲み

【七通目】

P79上 L1 冒頭部の「おお、あの夜のこと」の右上肩に【女―男】の書入、
【おお、あの夜のことでおそろしさうに顔を伏せてをります。】

にライン、【あの夜】を丸囲み（↓P79下 L11も同様）

P79上 L2 【遠雷】を丸囲み、欄外上部余白に【雷（丸囲み）】の書入

P79上 L10 【夏萩】を丸囲み（↓P79下 L3、P80上 L9、P80下 L11、P81下 L2、P82上 L8、

P82上 L-3も同様）

P79上 L-2 【少将】を丸囲み（↓P80上 L2、P80上 L7、P80下 L2、P81上 L6、P82上 L6も

同様）

P79下 L12 【わたくしはいまだにくみるともなしにながめやりながら】にライン

P79下 L-5 【伊勢ものがたり】を丸囲み

P79下 L-4 【大淀の松はつらくもあらなくにうらみでのみもかへる波かな】に
ライン、そこから欄外左余白へ線を引き、【七十二段】の書入

P80上 L7 【あなた】を丸囲み（↓P80下 L-5、P81下 L2も同様）

P80上 L8 【うたがひが兆す】にライン

P80上 L10 【雨の音に氣をとられてゐるがによそほひながら】にライン

P80上 L-8 【とどろく雨】にライン

P81上 L6 【あなたはほんたうに少将を戀うてゐるのか】にライン

P81上 L8 【はい、お慕ひいたしてをります】にライン

P81上 L13 【耳にとどく雨のひびき】にライン

P81上 L6 【わたしはなんだか今はじめてくほんたうに戀ひはじめることがで
きた氣持がする】にライン

P81下 L5 【いままで氣附かずにあた雨の音】にライン

P81下 L-7 【渝らぬ雨のとどろき】にライン

P82上 L7 【人目も草もかれはてたわたくしの蓬の宿】を丸囲み、そこから欄
外右余白へ線を引き【古今冬315】の書入

P82下 L1 【菊】を丸囲み

P82下 L4 【黄菊】を丸囲み

P82下 L7 【もろびとの欣求する浄土のありさまを】をライン、「」で囲む

P82下 L10 【瑠璃の池】の網掛け部分から欄外右余白へ線を引き【璃】の書入

(修正)

P82下L-1 【みのもの月】を丸囲み

3. 「みのもの月」書入から見えてくるもの

「みのもの月」は、〈女〉と〈男〉の七通の手紙によって構成された書簡体小説であるが、清水は七通すべての冒頭に（女―男）のような形で差出人と受取人を書入している。また、その他の書人は、作中に登場する人物名ならびに「古今和歌集」、「伊勢物語」等からの引歌の出典を記したものになっている。先に少し述べたが、これまで「みのもの月」に影響を与えた古典作品としては、「かげろふ日記」とその原典の「蜻蛉日記」のほか、「和泉式部日記」、謡曲「羅生門」等が指摘されてきた。一方、和歌関係については、小笠氏が「古今和歌集」「催馬楽」等からの引用も見られる^{*6}とわずかに言及するにとどまり、その内実までは明らかにされていない。

清水が指摘する、「みのもの月」における引歌は以下の九首である（催馬楽「浅水」、「伊勢物語」第七二段については、作中に歌が全文引用され、作品名なども記載されていることから除外している。また、歌の上に振っている番号は、作中に登場する順を示す）。

(1) 「古今和歌集」^{*7}

- ④ (巻3 139) さつきまつ花たちはなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする
- ⑨ (巻6 315) 山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草も枯れぬと思へば
- ⑤ (巻11 470) をとにのみきくのしら露夜はおきて昼は思ひにあへずけぬべし

⑧ (巻11 482) 逢ふことは雲居はるかになる神のをとにき、つつ恋ひわたる哉

① (巻11 488) わが恋はむなしき空に満ちぬらし思やれども行かたもなし

② (巻11 544) 夏虫の身をいたづらになす事もひとつ思ひに困りてなりけり

⑥ (巻11 561) 夜みの間もはかなく見ゆる夏虫にまどひまされる恋もする哉

⑦ (巻11 600) 夏虫を何か言ひ剣心から我も思ひにもえぬべら也

^{*4}の「古今和歌集」139番歌については、ラインのみで巻数や歌番号が記されていない。

(2) 「伊勢物語」^{*8}

③ (第73段) むかし、そこにはありと聞けど、消息をだにいふべくもあらぬ女のあたりを思ひける。

目には見て手にはとられぬ月のうちの桂のごとき君にぞありける

三島は、④⑨を除き、和歌を引く際に、「『むなしきそらにみちる』のは『わがこひ』とも疑はれて」のように、歌の一部を「」で強調するように表示している。和歌ではないが、「枕草子」第三七段の引用箇所についても同様で、「色こく咲きたる」と「」で示されており、引用したことが分かりやすくなっている。出典元は、「古今和歌集」巻一一（恋歌）からのものが圧倒的に多い。

巻名と歌番号のみの書入から、清水がこの「みのもの月」をどのように

解釈したのかを理解することは非常に困難である。しかしながら、「みのもの月」は、数多くの引歌によって紡がれた物語である、と清水が認識していたことは、少なくとも言えるのではないだろうか。

そもそも、多くの歌が引かれた「古今和歌集」は、清水にとって重要な意味を持っていた。戦中に書かれた日記^{*9}には「新春を期し、大物にぶつかつてゆかう。古今集にか、らう。これは僕の学生時代からの対象だ」（昭和一四年一月四日）とある。

4. 三島と「古今和歌集」を結ぶもの

では、三島は「古今和歌集」をどのように捉えていたのだろうか。松本健は、三島の古今観が蓮田のそれに多く影響を受けていることを指摘している。「戦争中は『ますらをぶり』が盛んに言ひたてられ、『たをやめぶり』の古今集は退けられ、蔑視されさへしたが、蓮田は、さうした時代に抗して古今集を情熱的に賞揚して止まなかつた」、それは蓮田にとつて古今集が「今日に、生きる、自分の、切実な、問題意識に、応へるもの、として、あつたからだ」と松本は言う。確かに蓮田が「詩と詩評^{*11}」で述べた「古今和歌集には、素質的なものよりも詩歌世界的なもの、その世界を『しる』といふ姿が著しいのである」、「素材に直情し、素質のひたぶるな進みによつて文學が噴き出るのでなくて、別に歌の世界、文學の天國が觸知され、これを『しる』所に歌が噴涌してゐる」、「自然がある以前に自然のあるべき或る秩序が豫想的に見られてゐる」、「自然から抽象されたやうに見えるが、實は自然に藝術的秩序を命課する絶対世界」といった古今観と、三島の、古今集の編纂は「詩の、精神の、知的黄土の領域の確定」であり、「地名も、名も、花も、

鶯も、蛙も、あらゆる物名が、（中略）あるべき場所に置かれた。（中略）事物は事物の秩序のなかに整然と配列されることによつてのみ、『あめつちをうごか』す能力を得ると考へられたのである^{*12}」、「古今集の世界は、われわれがいゆる『現実』に接触しないやうに注意ぶかく構成された世界」、「一定の効果への集中度によつて、混沌が整理され、整頓された自然はじめて人間のなものになる（中略）この秩序の觀念こそ、『みやび』の本質^{*13}」といった古今理解は相通している。しかしながら、三島の古今観が全て蓮田に負うものなのかといへば、決してそれだけではない。

例えば清水は、『文藝文化』に「古今集の花の歌」と題する論考を寄せている。この中で紀友則の「久方の光りのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ」という歌を挙げ、「この『花』は客観の、おそらく庭前の『花』にして同時に純粹客観の『花』ではない」、「この『花』は『梅の花』でも『櫻』の花でもいゝのである。さういふ特殊相を捨像した、何かかう至高至美の或るものがここで『花』とよばれてゐるのだ」、「事實は『梅の花』とも『櫻の花』とも推定のつくものが、單に『花』としてのみ詠まれてゐる歌が、『櫻の花』の歌四十一首にすぐ續けて三十首入つてゐるのも、もと／＼『花』を描くのでなく、『花』と、歌ふといふ、當代歌人の獨自のポーズによるものである。この胸に鬱結した思ひを『花』に托すといふ當代詩人共通のポーズは、あらゆる美しきものへの絶対随順の精神なしにはかなふものでない」といった指摘を行っている。一方三島は、「日本文学小史」の中で、「古今和歌集」において、「花は、あの花でもこの花でもなく、妙な言ひ方だが極度にインパーソナルな花」なのであり、このような「詩的王国の花」は、「かすかな金属的な抽象性さへ帯びて見えるけれど、それは決して人工的な造

花なのではなく、あらはな『真実』の花なのである、「花のイメージは約束事として厳密に固定」されることで、「独創性は禁止され」、これによって歌人は「安心して花をめぐる自分の感懐を歌ふことになる」と、また、「古今集と新古今集」では、「古今集の『みやび』が何を意味してゐるか、(中略)すはなち、この世のもつとも非力で優雅で美しいものの力という点にすべてが集中」と述べており、両者の考えには重なることが多いことが分かる。

三島に影響を与えたのは、蓮田と清水だけではない。『文藝文化』には、清水、蓮田をはじめ、保田與重郎、本位田重美、中河與一、岡野直七郎、西下經一、山岸外史らが「古今和歌集」に関する論考を寄せている。また、「みもの月」に二首ほど取られている「伊勢物語」については、清水、蓮田、池田勉、遠藤嘉基らが論じており、これらの古典は、同人における共通の研究対象であったことがうかがえる。『文藝文化』の同人たちは「古今和歌集」の輪読会を行っていた。先に挙げた清水の日記には「明日松尾君の所で、古今集の輪講ある筈なりしが、(以下略)」（昭和一五年一月一〇日）、「古今集ノ会ノ拡張(『文学』ヘニューストシテ出ス)」（昭和一六年二月一七日）、「学校から帰つてくると、机の上に一升壺が置いてあった。(中略)午前中に平岡公威君がもつてきてくれたとのこと。(中略)一週間の予定で舞鶴海軍機関学校に軍隊生活に出発するので、今夜の古今集の会に出席できないといふことを断りかた／＼来たのだといふ。手紙が添へてある。公威君からである」(昭和一九年七月一日)、「(前略)林富士馬、平岡公威両君がきてまつてゐる。古今集の会があるつもりで来たといふ」(昭和一九年七月二九日)等々、この会に関する記述が散見される。清水は後年、この会について次のように述懐^{*16}していた。

「花ざかりの森」掲載が縁となつて、『文藝文化』同人の会合にも顔を出すようになった。そのうち、古今和歌集輪読会が、同人の蓮田善明・池田勉・栗山理一、私のほか、松尾聰・本位田重美の諸氏も加わつて、月々開かれることになり、それにも三島君はほとんど毎回出席したように記憶する。(中略)そのころは、実作・理論ともに、いわゆる万葉派全盛時代で、古今集はほとんど顧みられなかったが、そういう時潮に抵抗する気持を、われわれは期せずして持ち合つていた。

(中略)一世を風靡していたアララギ派の写生論の用語では、到底捉えられそうにない古今集の本質を遠巻きにして、もどかしく口ごもりながら議論を交わしたことを、今も思い返している。そういう議論の輪の中で、終始目を輝かしながら、一人一人の発言に聴き入っていた三島少年の顔も鮮やかに浮かんでくる。

三島は後年、自身と「古今和歌集」と関わりについて、「行動の時代の只中にゐて文学に携はらうとする少年が、『言葉』とは何か、といふことを考へるときには、まづ言葉の明証として立ち現はれた」、「今、私は、自分の帰つてゆくところは古今集しかないやうな気がしてゐる。その『みやび』の裡に、文学固有のもつとも無力なものを要素とした力があり、私が言葉を信じるとは、ふたたび古今集を信じることであり、『力も入れずして天地を動かし』、以て詩的な神風の到来を信じることなのであらう」と述べている。習作期において蓮田、清水をはじめとする『文藝文化』同人たちとの関わりを持つことで、三島は「古今和歌集」と深く向き合つた。その経験が、彼の文学観の礎を築いていったことは、今更言うまでもないだろう。

5. 「みのもの月」における和歌の効果

ここまで「みのもの月」に「古今和歌集」をはじめとする多くの和歌が引かれていること、また『文藝文化』同人との関わりの中で「古今和歌集」に触れたことが、三島の創作活動に大きな影響をもたらしたことを見てきた。次に、三島は「古今和歌集」をはじめとする歌を、自身の創作にどのように取り入れていったのか、ということについて少し考えてみたい。

西沢正史氏は、「文学作品における引歌は、物語や日記の作者が、作中人物および読者の、引用された和歌を熟知しているという共通の認識・共感的感動を前提としてなしうる修辞法」であり、「作者・作中人物・読者の共通的・共感的な磁場が設定されることによって、引歌は、作品世界に微妙な余情的広がりを与え、重層的・立体的な陰影をもたらす」と指摘している。「みのもの月」において、女から男へ、あるいは男から女へ、また男から少将へと宛てた文に、数多くの和歌が引かれているという点により、まずは作者たる三島の古典素養が裏付けられ、同時にこの作品の登場人物たる三者の持つ教養のほどが示された。そして受け取り手である読者には、作者や登場人物のもつ教養と同等のレベルが求められたのである。和歌の一部が、わざわざ「」で強調するように引用されているのは、『文藝文化』同人は別として、さほど「古今和歌集」に馴染みのない（かもしれない）一般読者に対する配慮と考えることもできよう。では具体的に、この引かれた和歌は、作品にどのような効果をもたらしているのだろうか。

一通目の手紙に引かれた488番歌は詠み人知らずの歌である。この歌には、〈私の恋い慕う思いがどうも虚空に充滿してしまつたらしい。思いを遣

ろうとするけれどその思いの行く方向もないのです〉という、やるせない一方通行の恋が詠まれている。この歌を、手紙末尾に配すことで、「どうぞお心を昔にかへして下さいまし。どうぞ再びわたくしに會ふと仰言つて下さいまし。御戻り下さいまし。後生。お戻り下さいまし。去つては下さいませぬ。どうぞもういちど、いちどで結構でございます」という、冒頭の、いささか狂気じみた女の感情が少し落ち着きを見せたのだろうことが分かる。なりふり構わぬ懇願をせずにはいられなかった女の激情的な恋心が、苦しみの果てに深い嘆きと諦念へ変わっていくという展開を自然に導く仕掛けとも言えるだろう。

二通目の手紙には「夏虫」という語が出てくる。544番も詠み人知らずで、〈夏の虫がその身を焼くのも、自分が身を焦がすのも、同じ「思ひ」が原因なのだ〉という歌である。「夏虫」とは夏に出て来る虫、ことに火に寄ってくる虫を指す。また蛍の異名でもある。「こひ」「おもひ」と「ひ（火）」を掛けて、恋の歌に詠まれることも多く、清水の書人でも、「古今和歌集」の歌三首（544番歌、561番歌、600番歌）が指摘されている。手紙の中で男は、友人である少将から「夏虫」のようだと揶揄われたことを女に書き送っているが、488番歌が、女の心情の変化を導くものであるとするならば、この三首は、自ら火に身を投じる「夏虫」のごとく、恋の「思ひ」に焼かれ、やがては「彼岸の旅」に向かつていく男の末路を、物語序盤にて暗示したものであると言えよう。また、この「夏虫」は、六通目の手紙において少将が女に書き送った「」のエピソードへと繋がっていく。「夜の間にはかなくなつた」と思しき「螢」は、「螢火のなごりもないひからびた骸」となり果て「色の褪めた藤」の花房の先にすがりついていた。これを見た少将は、

「なにかしら世の果てに立つてゐるやうなさびしさ」を覚え、涙を流す。ここの「螢」は、先に描出された「夏虫」同様、やがて男が至るところを表象していることは言うまでもない。

ところで少将は、「藤」は『色こく咲きたる』こそいとめでたからうものを、これはもの哀しいほどに色の褪めた藤であったとわざわざ綴っている。この「色こく咲きたる」という表現に、清水は丸囲みをしている。作品名や段数の書入はないが、おそらく「枕草子」第三七段の「木の花はこきもうすきも紅梅。桜は花びらおほきに葉の色こきが枝ほそくて咲たる。藤の花は、しなひながく色こく咲きたるいとめでたし」(木の花は色の濃いのも薄いのも紅梅が良い。桜は花びらが大きく葉の色が濃いのが良い。枝は細くて咲いているのが良い。藤の花はしなやかに垂れ下がった花房が長く色濃く咲いているのが実に素晴らしい)を踏まえた箇所だと指摘しているものと思われる。「枕草子」を引き、「色こく咲きたる」という語を持ち出すことで、「色醒めた藤」そしてそれにすがりつく「螢」のはかなさ哀れさがより一層強調されている。

同じ「枕草子」三七段には、藤に続き、橘についての記述がなされている。この箇所は「古今和歌集」139番歌「さつきまつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする」を念頭に置いて書かれたと²⁰されている。この歌は「伊勢物語」第六〇段にも登場するのであるが、三通目の、女から男へあてた手紙、そして四通目の、男から少将にあてた手紙の中に「橘の香」という記述が見られ、清水はこの二箇所をラインを引いている(巻数や歌番号などの書入はない)。「伊勢物語」六〇段は、(宮仕えが忙しく妻に十分な愛情を注がなかった男がいた。妻はより自分に愛情を注いでくれそうな男につ

いて、他の国へ行ってしまった。のちに男は宇佐八幡宮へ使いとして行くが、そこで元妻が、今はある国の接待役の妻におさまっていることを知る。男は、この元妻に酌を命じ、その場で「花橘」の歌を詠む。この歌を聞いた女は山に入り、尼になった。)という内容の話である。妻、男(昔)、祇承の官人(今)という三角関係の中にあつて、「橘の香」は、女に過ぎ去った昔(男)を思い出させるものとして機能している。一方「みのもの月」では、(祭りの日、家でうち臥せていた女は、ふと橘の香が流れてくるのに気づく。その後、門前を通る車の音を聞いた女に、これは男の車の音なのではないかという第六感が働く。他方男は、受領の女にせがまれ祭りに行った帰り、望まずながら女の家の門の前の道を通ることになる。女の家に近いなかで、男は強い橘の香を嗅いだ。思わずはつとうち伏す男の傍らで受領の女はこの世のものではないような笑みを浮かべていた。)という、男、女(昔)、受領の女(今)をめぐる三角関係の中で「橘の香」が用いられている。「橘の香」と、それに続いて聞こえた車の音によって女が、「わが戀をふりかへつてわづらはしく思ひをめぐら」せるといふ点では「伊勢物語」と似通っているが、同じ香りを男も嗅ぎ、これまでに女から寄せられた激しい恋情を思い起こしながら、とてもそれに応えることはできないと考えるところは、三島のオリジナルだろう。女と男は、邸の中と、門の外と、互いに顔を合わせることもなくすれ違った。しかしそのすれ違ひざまに香った「橘」の匂いによって、二人の思ひは一瞬交錯し、しかしやがてまた、別々の方向へと向かっていく。引歌をそのまま用いるのではなく、さらにひねりを加えることで、物語に「重層的・立体的な陰影」をつけようとする三島の工夫が冴えわたっている箇所と言える。

続いて五通目の手紙に引かれているのは482番歌だが、「あふことはくもあはるかに」と引かれるべきところ、「あふことのくものはるかに」となっており、清水は誤りを修正する書人を行っている。なお、この箇所は初出誌のまま現在に至っており、初刊本「花ざかりの森」や、「三島由紀夫十代作品集」、「三島由紀夫短編全集」などでも訂正がなされていない。この歌のあとには、「あさんづの橋のとどろとどろと降りにし雨の」とある催馬楽「浅水」が引かれているのだが、歌に詠まれた遠雷と雨は、七通目の手紙にある、男と女の別れの場面へと繋がっていく。雨の中で男と女の別れが繰り返されるのだが、この雨は、冒頭の488番歌にある「思ひ」の満ちた「むなしき空」と呼応していると言えるだろう。飽和状態になった「思ひ」があたかも涙のように、「雨」となって「とおとおと降りしき」るのである。

清水は、「晝のうちにはほがらかに遠雷なぞがひびいてをりましたものを、(中略) 雨のおとにまじる稲妻のためき(中略) 煙つた雨足がものけしきをかき消ちてゆくありさま(後略)」、「わたくしはいまだに氣のとほくなるやうなひびきを立てて降つてゐる雨を、みるともなしにながめやりながら」、「雨の音に氣をとられてゐるかによそほひながら」、「とどろく雨」、「耳に届く雨のひびき」、「渝らぬ雨のとどろき」と、二人の別れの場面における雨の描写にラインを引いている。

「あなたはほんたうに少将を戀うてゐるのか」と男に問われ、「はい、お慕ひいたしてをります」と女が答える場面では、男も女も「耳にとどろく雨のひびき」が耳に入っていないことが示され、緊迫した、静謐な時間・空間がそこにあつたことが強調されている。そしてまた、「この雨のために目にしるく秋の立ちそめた」とあるように、雨によって次の季節が始まり、

男の出家と死、少将の足が遠のいたこと、夏萩の病とが語られ、555番歌にあるような、「人目も草もかれはてた」蓬の宿となり果てた家の庭を、女は一人「この地上にあつて苦しみにたへ」ながら佇むという最終場面へと読者を導いていく。清水が着目したように、女と男の別れを描いたこの場面における「雨」の役割は非常に重要なものであると言える。

以上、三島が「古今和歌集」をはじめとする歌を、自身の創作にどのように取り入れていったのかを見てきた。三島は、『文藝文化』同人との交わりの中で、すっかり血肉とした「古今和歌集」、「伊勢物語」などの和歌を、「みのもの月」の中に引くことで、教養と知性に満ちた登場人物を造型し、王朝人の、「待つ」＝「耐える」苦しみと悲しみを「重層的・立体的」に描出していった。そしてまた、和歌から和歌へと連想をつなぐことによって、物語を展開させていったのである。

6. おわりに

ここまで「みのもの月」における書人を元に、清水がこの作品を「古今和歌集」を中心とする和歌によって紡がれた物語として理解していたこと、三島の古今観を形づくったのは蓮田、清水を始めとする『文藝文化』同人との関わりによってであったこと、「古今和歌集」、「伊勢物語」といった引歌が「みのもの月」の物語世界に「余情的広がりを与え、重層的・立体的な陰影をもたら」していることなどを見てきた。

これまで三島文学と日本古典文学作品との関りについては、ごく一部の作品で影響関係が指摘されるのみで、どちらかと言えば三島が古典から得た文学観に着目されることが多かったと言える。「古今和歌集」についても

齊藤菜穂子氏が「三島にとつての『古今集』は、彼の文学観のみならず、その自然観そして世界観にまでおよぶ重要な意味をもつ」、松本徹氏が、「最も原型的な自らの文学理念を具現したものと捉えたのである。それとともに、現実の望ましい社会・政治体制を示唆するものと考えることによって、政治行動とも結びつくことになった」と述べているように、重要性は認められながらも、では、具体的にどのような作品と関連を持ち、どのような影響がみられるのかといった点については検討がまだ十分になされてこなかったように思う。

従来指摘されてきた蓮田に加え、清水やその他の『文藝文化』同人との関わりの中で三島がどのように古典を享受し、また、それによってどのような文学観が形成されていったのか、そしてそれらはどのように作品に結実していったのかについて、もっと厳密に掘り下げていく必要があるだろう。清水の書人はその手掛かりとして非常に貴重な意味を持つと思われる。

三島文学は、学習院という場や清水をはじめとする『文藝文化』同人らによって、複合的に生成されていった。しかし、両者は、導くもの、導かれるものといった一方通行の関係では決してなかった。「三島君が、その死に至るまで、私の心に灯を点じつづけてくれたことは、別の言葉でいえば、私に人生の課題を与えつづけてくれたことでもある」、「(前略)荒涼たる祖国の現状を前にした私にとつて、三島由紀夫の健在が、唯一の心の灯となった。その灯は、彼の死にいたるまで、私の歩む道を照らしつづけてきた。三島君は、折目正しく、終始私を師と呼んでくれたが、そのことを私は、もったいなくも、おおけなくも思っている。教室の黒板を背にするか、前にするかで、師弟の関係が成り立つというのならば、私が彼の師という

ことになるのであろうが、逆に私は、彼を文学と人生の師と心に仰ぎ続けてきた」と清水は三島の死後、語っている。また、「潮騒」を評した文章において、次のように述べている。

「真夏の死」の終りにも、女主人公の上に、「待つてゐる」という言葉が何度か使われています。この言葉は、小生には迂闊に読みすごすことのできないものです。永年親しんできた王朝の女性たちの、あの悲しみに限どられたポーズにも通うものですが、「待つことを知ってる」とは、「自分の力を知ってる」と別ではないと思います。さらに言えば、「待つ」ことは「堪へる」ことにすぐ結びつきます。

ともかく、小生がこの数年来もちつづけた主題が、三島由紀夫に本質する発想と方法によって見事に造型されていることを知った喜びで、胸がいつぱい입니다。こんなうけとり方は、随分勝手な理解だといわれるのは覚悟の前ですが、小生にとつては、これはこれでいいのだと思います。

清水は、『文藝文化』に、堀辰雄の「かげろふ日記」を称賛する文章を寄せている。「山村雑記」にある「日記や家集の中で、彼女たちの涙ぐましさの中からちつと我々を見つめてゐるやうな、そしてそれをしばしば手にすることもあつた學者たちはそんな目ざしには少しも氣づかなかつた」という堀の主張に対し、清水は、「國文學を研究する國文學者に、『詩人』の要素を排除しているといふやうなことは、もしく滑稽に類する」、「客観的、科學的といふことを至上のモットーとして古典作品の文獻を、只精細緻密

な分析の対象に曝すことが滔々として風をなしてゐた國文學界においては、もう久しいことこの『詩人』の目は蔽はれてゐる」と認めた上で、「『詩人』の胸にしか古典作品の精神は蘇生つて來ないといふことは、國文學の研究がそれらにもあつても、絶えず省慮すべき事柄」とし、作家と國文學者がそれぞれの方法で、古典作品を「我々の裡に生かす」必要があると述べている。

清水文雄と三島由紀夫は、師として、教え子としてではなく、純粹に國文學者として、作家として、同じような問題意識を自分なりの方法で追及していった。そして、それぞれの切磋琢磨、また相互に与えあつた影響の中で、すぐれた作品と業績が生み出されていったのである。

- * 1 拙稿「比治山大学蔵『三島由紀夫文庫』調査報告」(『比治山大学現代文化学部紀要20』平成25・3)、「比治山大学蔵『三島由紀夫文庫』調査報告(2)」(『比治山大学紀要21』平成26・3)、「比治山大学蔵『三島由紀夫文庫』調査報告(3)」(『比治山大学紀要22』平成27・3)
- * 2 三島由紀夫「あとがき『花ざかりの森』——」(『三島由紀夫作品集4』昭和28・11 新潮社)
- * 3 三島由紀夫「あとがき1」(『三島由紀夫短編全集1』昭和40・3 講談社)
- * 4 三島由紀夫「自己改造の試み—重い文体と鷗外への傾倒」(昭和31・8 『文学界』)
- * 5 相原和邦「三島文学と『文芸文化』」(昭和46・6 『文学研究33』、奥野健男氏『三島由紀夫伝説』(平成5・2 新潮社)、小笠裕二『みのもの月』論(平成10・2 『金沢大学国語国文22』、柳川朋美『三島由紀夫『みのもの月』論—堀辰雄『かげろふ日記』『文芸文化』との関わりから』(平成14・12 『同志社国文学57』) 小笠氏前掲書に同じ。
- * 6 小笠氏前掲書に同じ。
- * 7 引用は全て、『新日本古典文学大系5』(平成元・2 岩波書店)に拠る。
- * 8 引用は、『新日本古典文学大系17』(平成9・1 岩波書店)に拠る。
- * 9 清水文雄『清水文雄「戦中日記」文学・教育・時局』(平成28・10 笠間書院)。同日記には、「古今集評釈(窪田氏)を読む」(昭和四年一月六日)、「古今集の恋の歌よむ。よめばよむほど、驚くべき歌だといふことが分る」(昭和一八年一月一日)等の記述が見られる。
- * 10 松本健「奇蹟への回路——小林秀雄、坂口安吾、三島由紀夫」(平成6・10 勉誠社)
- * 11 蓮田善明「詩と批評(上)〜(下)——古今和歌集について」(昭和14・11〜15・1 『文藝文化17〜19』)
- * 12 三島由紀夫「『懐風藻』と『古今和歌集』——『日本文学小史』の内」(昭和45・6 『群像』)
- * 13 三島由紀夫「古今集と新古今和歌集」(昭和42・3 『国文学攷42』)
- * 14 清水文雄「古今集の花の歌」(昭和14・5 『文藝文化12』)
- * 15 清水の『戦中日記』(前掲)の解説に、「古今集は、伊勢物語と共に同人の共通の古典であつたので、同人間でしばしば究明の対象

となっている」とある。

- * 16 清水文雄「古今の季節——学習院時代の三島由紀夫——」（昭和59・8『続 河の音』）

- * 17 * 13に同じ。

- * 18 西沢正史「中世日記文学」とはさすがたり』引歌考——『新日本古典文学大系』への批判を中心として——」（平成12・12「駒沢女子大学研究紀要7」）

- * 19 引用は、『新日本古典文学大系25』（平成3・1 岩波書店）に拠る。

- * 20 「新日本古典文学大系5」（前掲）の注釈に拠る。

- * 21 齊藤菜穂子「うたはあまねし」（松本徹・佐藤秀明・井上隆史編「三島由紀夫事典」平成12・11 勉誠出版）

- * 22 松本徹「古今和歌集」（「三島由紀夫事典」前掲）

- * 23 清水文雄「三島由紀夫のこと」（昭和46・2『文学界』）

- * 24 清水文雄「孤島の若者——『潮騒』の作者三島由紀夫へ——」（昭和29・7『読書ノート』）

- * 25 清水文雄「かげろふの日記」について」（昭和14・8『文藝文化14』）

- * 26 堀辰雄「山村雑記」（昭和13・8『新潮』）。のちに「七つの手紙——或女友達に——と改題され、さらに「かげろふの日記」が刊行された際、「『かげろふの日記』に関する著者の若干の手紙」と題して序に用いられた。

※「みのもの月」を除く三島の文章は全て、『決定版三島由紀夫全集』に拠った。

〈キーワード〉比治山大学蔵「三島由紀夫文庫」、清水文雄、「みのもの月」、「古今和歌集」、『文藝文化』

九内 悠水子（現代文化学部言語文化学科日本語文化コース）

（二〇一七年十月三十一日 受理）

【付記】 本稿は、科研費（16K16777）「習作期における三島由紀夫文学生成過程の解明」の助成を受け、行った研究成果の一部である。